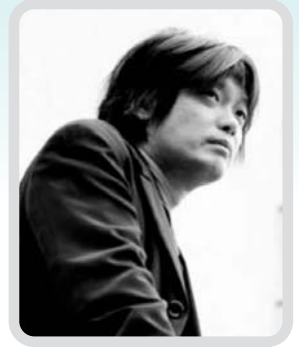


映画「哲学への権利」の上映を通じて切り開く人文学の展望

首都大学東京 人文科学研究科 准教授
西山雄二



研究の背景

学問は、教育や研究、大学や研究機関、学位称号、文献、図書館や収蔵庫といった社会的な諸制度によって存続してきました。それゆえ、哲学者がそうした諸制度と学問の関係を自覚的に問うた上で、あえて既存の制度の周縁に哲学の研究教育機関を創設した試みは興味深く思われます。現代フランスの哲学者ジャック・デリダは伝統的な大学制度の門外漢だったものの、哲学と大学の実践と理論の両面で真摯に問い続けました。1983年、彼は哲学の領域横断的な可能性を引き出すために「国際哲学コレージュ」をパリに創設します。私は科研費研究の一環として、この組織の実態を記録映画「哲学への権利」としてまとめました。

研究の成果

映画「哲学への権利」は、関係者7名への取材をもとにしたドキュメンタリー映画です。本作の目的はたんにデリダが創設したコレージュを紹介することではありません。この研究教育機関の独創性を例として、本作では、収益性や効率性が追求される現在の趨勢において、哲学や文学、芸術などの人文学の可能性をいかなる現場として構想し実践すればよいのかが問われます。映画は2009年以降、日本のみならず、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリス、韓国、香港でのべ60回

以上上映され、その都度、大学と人文学の在り方を問う討論会を併催してきました。学生や大学院生、教員、一般市民と討議を重ねながら、「役に立たない、お金にならない」とされる人文学は苦境に立たされているものの、そのさらなる存続と展望に向けて尽力している人々の熱意を感じました。

今後の展望

人文学研究では文献を読み、論文を執筆して成果を出すという方法が一般的です。そうした従来のスタイルと比べると、今回は映画製作と巡回上映、討論会、DVD書籍の刊行と何重もの迂回をしたことになります。ただ、「文章から文章へ」という方法をとる人文学にはこうした迂回こそが必要ではないでしょうか。映画の旅を通じて私が得られたのは、国際的な学術ネットワークの構築と、さまざまな国で市民から研究者までを巻き込んだ共同作業でした。

関連する科研費

平成20-21年度 若手研究(B)「哲学、教育、大学をめぐるジャック・デリダの理論と実践」

平成22-25年度 基盤研究(B)「啓蒙期以後のドイツ・フランスから現代アメリカに至る、哲学・教育・大学の総合的研究」



図1 映画上映・討論会の成果はDVD付の著作『哲学への権利』(勁草書房)として刊行された。出版に際して、全国の主要書店や大学生協の計20ヶ所以上で関連ブックフェアが開催され、大学と人文学を問い直す契機を提供した。



図2 2010年3月、東京大学(駒場)での上映・討論会